



「お薬を1回投与しただけで病気がすっかり治れば良いのに。」病気で悩んでいる患者さんはそのように一度は夢想したことがあるかもしれません。現実には1回の投薬で完治するといったことは難しいですが、既存治療に比べて治療効果のインパクトが大きい薬剤が、昨今、皮膚科分野でも登場しています（治療効果には個人差もあります）。アトピー性皮膚炎は赤みやブツブツに代表される湿疹が、膝の裏や肘の内側、首や顔、背中やお腹、手や足など色々なところに生じ、またそれに伴って痒みも伴う皮膚の病気で、悩んでいる患者さんも多くいらっしゃいます。直接的な原因は分からないことも多いですが、炎症を起しやすい体質が背景にあり、時には何らかのアレルギ

選択肢の増えたアトピー性皮膚炎の治療

諏訪赤十字病院

皮膚科部長

うんのとしのり 海野 俊徳

機序の異なる外用剤や注射薬も登場



1も含めて環境要因で悪化した改善したりと、長期間に渡っての付き合いが必要です。



皮膚は外界と生体の仕切りとして働く器官であり、外界からの物理的的刺激や侵入する微生物に対する最初のバリアとなります。アトピー性皮膚炎を含めた乳幼児期の皮膚炎では、その荒れた皮膚から侵入した物質に対してやがてアレルギーを起し易くなる（経皮感作）という新たな学説が2008年に提唱さ

れ、皮膚をより良い状態（皮膚から異物が侵入しにくいバリア機能を高めた皮膚）に保つことの重要性が示されました。この知見は食物アレルギーの治療においてもパラダイムシフトを引き起こしました。

アトピー性皮膚炎の治療は、炎症を抑える為にステロイドの外用と、皮膚の状態をより良く保つ為に保湿剤の外用を行ってゆくのが治療の基本となってきました。これらの治療に加えて、アトピー性皮膚炎の炎症を生じる詳しいメカニズムが分かってきたことにより、ピンポイントに炎症を生じる分子を抑える生物学的製剤である注射薬が2018年に使用できるようになりました。今までの治療法ではなかなか改善が難しかった重症のアトピー性皮膚炎が、かなり改善することもしばしば見受けられるようになってきました（この薬の使用にはいくつか条件もあります）。

皮膚のバリア機能についてもメカニズムが分かってきていますが、その機能も改善する期待される新しい機序（働き方）の外用剤が今年から使用できるようになり、外用の選択肢が広がってきています。ステロイド外用や保湿剤の外用といった従来の治療が基本であることに変わりありませんが、機序の異なる外用剤や注射薬も登場したことは治療の選択肢が増え、アトピー性皮膚炎に悩む患者さんにとって朗報と言えます（この病気で悩みの方は皮膚科で御相談頂くことをお勧めします）。

※ 次回は11月15日掲載予定

筆者プロフィール
海野 俊徳
（うんの としのり）
諏訪赤十字病院 皮膚科部長
【所属学会 専門医】
・日本皮膚科学会 皮膚科専門医
【出身】
伊那市